

機能しなかった上からの流れ

筆者は東日本大震災の被災地仙台に住んでいる。この度の震災はいろいろな事を我々に教えてくれた。それらの一つは「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」の大切さである。これは普段、マスコミに取り上げられることも、学界で議論されることもない。行政にとってもルーチンワークの対象である。この度の震災ではこれが一挙に失われたわけである。そしてこの「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」が実は世の中の大部分を占めていることを思い知った。

普段マスコミに取り上げられることのほとんどは、権力やお金の流れに沿ったものであり、また、学界で注目を浴びるものは、そのときの学界の価値観の流れに沿ったものである。これらはちょうど大きな岩塊に上から水をかけるようなもので、その水は流れるところには流れるが、流れないところには流れない。そしてそれが実社会という底辺に行けば行くほど、流れない場所の割合は大きくなる。そこでは権力やお金や学界の価値観に沿った課題は取り上げられるが、「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」に潜む多くの、そしてその地域にとって切実な個々の問題はなおざりにされる。

環境問題は、この「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」とそれをとりまく環境との相互作用の総体である。環境問題において、研究者が地域に入り、地域の現実の問題に直面し、それらに真っ正面から取り組むことの重要性はそこにある。震災は環境問題の最たるものである。

震災時にあっては、この上からの流れはほとんど機能しなかった。普段地域に入ることのない上級官庁、一流企業、そして一流大学の人間は、想定外の事態になすすべもなく、また動いても空回りするだけであった。その一方で、普通の人々の普通の営みが、お互いを助け、生きる活路を見出し、お互いを励まし合った。そして今は地域の復興の真の原動力となっている。